

(1)



キター!! 直江兼続展 Part II

九里祭展示 8/30・31

戦国の世に
愛を掲げた武将兼続に
ふたたび取り組む

加藤 哲朗(3-1)

今年(今年)は異例の早さで九里祭の展示テーマが決定しました。それは昨年と同じ「直江兼続」で、早期決定の理由は、昨年中越沖地震のために行けなかった兼続の新潟へ研修旅行をしたいとみんな思っていたからでした。とうとうそれが実現したことで、兼続展に取り組み活力と意欲を高める事ができました。

九里祭の準備は全夏休みを使い、文化実行委員を兼ねている人も工夫して時間をつくり、みんなで取り組みました。そして私達は、兼続の生まれ故郷とゆかりの地に行



九里学園高等学校
図書委員会
印刷(株)川島印刷
TEL 21-5511(代)



くことで、彼が考えた事や彼の人物像について想いを馳せることが出来ました。

兼続の「愛」の字は、「愛染明王」と言う説が有力なのだそうだが、上杉家を背負って大きな決断をしなければならなかった兼続を見聞きするうちに、私は、兼続の愛は民衆への慈しみの「仁愛」なのだと思いました。

今年の作品では「長谷堂の合戦屏風」の模写に時間をかけました。描きながら大將がみんな背負っている風船のような帆は何だということになり調べました。味方に居場所を知らせるため、そして大將めがけてくる流れ矢を防ぐためだったということがわかり、大きな発見をしました。また、屏風は一隻で一日を描いている、兼続が左右にいる事がわ

石田三成の遺児を匿う

かくま

(展示の中から)

兼続 エピソード

中嶋 澄乃(2-7)



石田三成と兼続には家康を挟み撃ちしようという企てがあったといわれています。直江状で激怒した家康は、上杉を倒すため小山までくるのですが、三成が兵を挙げたと聞き、家康は三成打倒のため引き返します。

その時、兼続は追撃しようとしたのですが、景勝から上杉の「義の戦い」にそむくということで反対され、追撃できませんでした。そして関ヶ原で三成は家康に敗れてしまいます。

その三成の遺児が兼続を頼って米沢にくるのです。兼続には「申し訳ない」という思いがあつたためか、川西町堀金に彼を匿うのです。そして慶長十四年(一六〇九)米沢の町割改正の際、桐町に堀金という姓を名づけて商人としました。その店は今の桐町のお店や洋服店のところ。その後、分家として東町(現本町三丁目)に石田の姓を復活させ、町の検断にとり立てたのです。

子孫は石田検断日記を残している、江戸時代の米沢の貴重な資料となっているそうです。

検断：町役場のような仕事と、警察・裁判などを行う役目

当日の展示は、三階の教室にもかかわらず、多くの方に来て頂きました。中には歴史関係の本を出版されている方もおられ、よく調べてあると言われ嬉しくなりました。高校最後の文化祭を成功させる事ができ、私は「みんなありがとう」という感謝の気持ちで一杯になりました。

成功
したよ
クラス読書会

三の五 「ホームレス中学生」

上杉公園で

ホームレス体験

三一五 遠藤 美穂

6/20

(5・6校時)

私たちのクラスは「ホームレス中学生」の本を読みました。そして四つのテーマ別班に分けてとり組みました。

家族愛を考える班は、先生方にインタビューをしてそれをまとめました。そしてホームレスについてまとめた班は、その数などをインターネットなどで調べました。他に本に登場する公園の模型を作った班もありました。

ダンボールで実際にハウスを作った班は、六校時に上杉公園まで持っていきクラスみんなでホームレス体験をしました。私は実際体験をしてみても著者の気持ちや家族への思いが感じられてよかったですし、上杉神社の観光客から驚きの目で見られながらのホームレス体験も、とても楽しかったです。

私はこの本を読んで、著者の田村さんが体験したことは「貧乏は自分を育ててくれた」と言いたかったのだと思います。



2の7・1の6 合同で
「オデッセイ号航海記

—クジラからのメッセージ— を読む

2-7 高橋 諒

二年七組はロジャー・ペイン著、「オデッセイ号航海記」について、一年六組と合同で読書会を開きました。この本は六章に分かれていたのですが、僕達も六グループに分かれて意見を言いました。

この本は、作者が世界の海の環境を調査したのをブログに掲載したのをまとめた本です。

海洋汚染による世界への影響が基本となっていますが、それ以外にも、クジラについての考え、ガラパゴスについての考えなどが含まれた多角的な科学書です。

読書会では、環境汚染などをどうやって止めるか、クジラと人との関わりはどうするべきかなど、さまざまな意見を出し合いました。考えを深めることができました。

最初はグループ毎に、その後は全体で、黒板に意見をまとめた紙をはって発表しました。

特にグループ毎の発表では、自由な話し合いができたと思います。



三校合同読書会

梨木香歩 著

「西の魔女が死んだ」

魔女をめぐる激しい応酬

南部コミュニティセンター 7/28

するおばあちゃんと共に生活し、成長していく過程を描いた物語です。

討論の内容は五つで、グループ討論をしました。当日までに本を読了し、事前に渡されたレジュメに各自書き込んだ意見を出し合いました。

私の班では、「おばあちゃん」の「その時々で決めたらどうですか。…だれがシロクマを責めますか」という言葉がマイの心境にどんな変化を与えたか」という質問に対し、「自分が楽だと思うところを選ぶのは自然なこと」と気持ち、自分を責めなくてもいいと思った」という鋭い意見が出され、はっとしました。

その後の全体討論では、「おばあちゃん」は本当に魔女だったのか」というテーマに対し、「魔女」というのはたとえていられるのだから、「そもそも魔女の定義とは何か」など、非常に激しい議論が繰り広げられ、私は、本というものは読み手によって様々な側面を見せるものであると感じました。

今回の読書会で、広い視野をもって本を読むことの大切さを学んだような気がします。

(三一八 相田 拓樹記)

六日町・上越市・与板・会津 兼続の新潟を訪ねる

図書委員研修旅行
7/19・20

3-3 中村 雅俊

今回の旅行の目的は、直江兼続の生涯を新潟を訪ねるといふものでした。行程はとも長く、何時間もかけてバスにゆられながら行きました。最初に着いた場所は、六日町です。六日町には長尾政景のお墓があります。政景は上杉景勝の父で、景勝が九歳の時に野尻池で遊興中に溺死してしまいます。その後、景勝は兼続と一緒に謙信にひきとられ、謙信から「義」の教育を受けるのです。長尾家の居城であった坂戸城に登りました。木漏れ日が気持ちよく、景勝も兼続もこの辺を走りまわったのだという思いで見えました。また、直江兼続と上杉景勝が勉強に励んだ雲洞庵



も堂々とした寺でした。そして上杉謙信の居城春山城跡では広大な広場に圧倒され、林泉寺では「第一義」の額、酒好きの謙信公の騎乗杯が印象に残っています。
二日目の研修は、景勝と相続争いをした、三郎景虎のいた御館を訪ねました。なんとそこは現在児童公園になっていました。与板城跡の山城に登りさらに徳昌寺にいきました。この寺は、米沢の林泉寺との寺争いで負け、四十年で与板にもどるといふ因縁のある寺です。
最後は会津の神指城を見ました。築城に際して家康にケチをつけられ中止した城です。兼続の無念の思いをひときわ大きい櫻の樹がもがたっているような所でした。

私の好きな主人公

大村あつし著 「エブリ・リトル・シング」
クワガタ売り場の店員

二一七 菊地 祥子



このクワガタ?

「エブリ・リトル・シング」の中で、私が一番好きな主人公は、「クワガタと少年」に登場するデパートの昆虫売り場の店員だ。彼はいたって普通で、特別魅力的なところがあるというわけでもないのだが……。

昆虫売り場に来てきた少年は、主人公である店員に声をかけた。「体の大きさもつもの形もほとんど同じなのに、なぜ三千円クワガタと三百円のクワガタがあるのか」と。その質問に対する店員の答えはとても単純で明快。三百円のクワガタは足が一本欠けている

からだという。しかし少年はその事を知りながらも、あえて一本欠けた五本足のクワガタを買い求めた。店員は普通のクワガタを勧めるために少年の手をとり移動しようとしたが、少年はバランスを崩してその場に倒れてしまう。ガキンという金属音と共に。店員がその音を不思議に思うと、少年は自分の右足のズボンまくった。彼の右足は、義足だった。

物語の最後のページ。店員は三百円のクワガタの値札に0を一つ付け加えた。最初と言った通り、主人公である

店員はいたって普通で、特別魅力的なところがあるというわけでもない。しかし店員は少年の思いに深く納得し、足が一本欠けたクワガタであっても一生懸命生きていくことに変わりはないのだと言いたかったのだと分かったと、言葉には出さず0をプラスする行動として示したのだ。少なくとも私はこの主人公の行為に共感し、まるで自分が主人公であるかのように物語を読み進めることができた。そして少年と店員の会話の中で、ものを見る価値の違いを知ることができた。

兼続激戦の地 畑谷・長谷堂 8/10

二回目の研修旅行は畑谷城と長谷堂古戦場に行きました。畑谷城は今年卒業した図書委員の江口真美さんのお父さんに案内してもらいました。城主の江口光清は、「すぐ降伏せよ」という義光の命をきかず「武士として最後まで戦う」として兼続軍に滅ぼされるのです。その残党が小滝に隠れ住んだといわれています。真美先輩のお父さんはその江口光清に繋がる人だそうです。

次に私達は東北の関ヶ原と言われた戦いがあつた長谷堂城に行きました。この城の頂上からは山形城がハッキリと見え、ここを落とされれば危ないという義光のあせりがわかりました。富神山周辺は、兼続が撤退を決めてから義光軍に追撃され激戦になったところでした。最後は最上義光歴史館でした。わずか十五歳で秀吉に打ち首にされた駒姫の話はあまりにも悲惨な話でした。

読書の楽しみ

中山 大輔 先生



一冊で数人分の人生体験 歪んだ愛に衝撃

私が本を読むようになったのは、通学時間の暇つぶしが目的でした。通学時間は中・高と電車で一時間半かかっていました。通勤ラッシュの中を勉強するだけのやる気もなく、かといって何もしないのは暇過ぎでした。文庫本は大きさも手ごろで、値段も安く、読むのに一時間はかかると通学にはもってこいでした。

武郎の作品を読み、大きな衝撃を受けました。谷崎潤一郎の作品を読んで、「えっ？これが愛？なのか!？」、「悦びなのか?」と衝撃を受けまくりました。描写も妙に生々しく、一文一文に想像力をかきたてられ、時間があつという間に過ぎていきました。小説を通して、他者を傷つける愛? (愛だったのかよくわからないが) を知り、歪んだ

だ愛に惹かれるようになりました。そして、有島武郎の「或る女」を読み、かつては愛だった憎しみの情に吐き気を覚えながらも、読書の面白さに捉えられていきました。読書は最初ただの暇つぶしでしかありませんでしたが、読書は自分が体験したことがないことを本を通して体験させてくれました。自分の人生が一人分ではないのに、本は一冊で数人分の人生を体験させてくれることが読書の面白さだと思います。学校の図書室にはたくさん本があります。皆さんも読書を通して様々なことを体験してみてください。

絵本の読みきかせ

地区図書委員研修会に参加して

10/30

2-1 戸田 裕介

十月三十日に長井高校で置賜地区の図書委員が集まって絵本の読み聞かせの研修会をしました。内容は、実際に絵本の読み聞かせをされている講師の方にやり方を学びました。そして僕は、絵本に対する見方が変わりました。今までは、絵本は小さい子供達が対象に読むものだと思っていましたが、僕達みたいな高校生向きの大切なテーマの絵本もたくさんあるんだということが分かりました。最後に代表の人がみんなの前で読むことになったのですが、代表のみんなは自分の個性を出して読み聞かせの工夫をしていました。例えば、鍋の沸騰の音をよりゆっくりと読み、じいさんの声と使い分けをした人がいて注目を集めました。また、足音を自分の足を本当に足ぶみをさせてより分かりやすくしていた人もいました。それにあえて最初は説明にしてキーポイントとなるところを大切に読む人もいました。

名著の伝記

<その11>

『時が滲む朝』

楊逸 著

みなさんは、天安門事件(一九八九)を知っていますか? 中国の民主化運動を政府が弾圧した事件です。この本は、その運動の中心となった大学生たちの苦渋にみちた挫折とその後を追って書かれています。学生たちは、別れ別れになって、崇高だった精神に揺れを感じながら、世の中と折り合いをつけながら生きてゆきます。その変化を著者はじつと見据えています。そして、人は、自分が立っている高さによって見える風景が違うこと、また「民主」というけれどその中身は、いい加減で曖昧なものだといっています。矛盾の中でもがいている彼等の姿は「滲む」という題名にこめられていてとてもいい作品です。

著者の楊逸さんは、日本に来て二十年、日本文学で新人に与えられる最高の「芥川賞」を、この本で取りました。

編集後記

今回の図書館だよりは、研究旅行と重なってしまい、発行が2週間近く遅れてしまいましたが、前期の図書委員会の豊富で活発な活動のまめを書く事が出来ました。原稿を寄せて下さったみなさんありがとうございます。



楊逸

時が滲む朝